

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520667

研究課題名（和文）木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較による日本古代文書論の再構築

研究課題名（英文）The reconstruction of the system of the Ancient Japanese documents by the mutual comparison of wooden tablets and Shosoin documents, compilations

研究代表者

市 大樹（ICHI HIROKI）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00343004

研究成果の概要（和文）：本研究では、「日本古代文書論の再構築」を目指して、木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較をおこなった。その結果、〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉を中心に新たな知見を得ることができた。研究成果は学会報告・雑誌論文・図書などの形で公表した。図書のなかには、一般読者向けの2冊の単著も含まれており、研究者に対してはもちろんこと、市民に対しても研究成果を広く還元することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：I mutually compared wooden tablets with Shosoin documents and compilations in order to reconstruct the system of the Ancient Japanese documents. In this study, I obtained some new knowledge: the function of documents, the use division of the paper material and wood material, the relationship between document transmission and vocal communication, and so on. I presented papers at academic conferences, I made some academic research reports, and I wrote some books which included two general books. I returned almost all of research results to many people, not only experts but also public citizens.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：木簡、正倉院文書、編纂史料、文書の機能、紙と木の使い分け、口頭伝達

1. 研究開始当初の背景

日本の古文書学は、久米邦武『古文書学講義』（1903年）、黒板勝美『更訂国史の研究総括』（1931年）に代表される研究に始まり、〈文書の様式〉を中心に長年議論されてきた。その到達点が、佐藤進一『古文書学入門』（1971年）である。その後、佐藤進一氏は「中世史料論」（1976年）において、〈文書の機能〉に関する研究の重要性を説き、新たな転換が図られていく。とくに日本古代史の分野で大きな研究成果をあげているのが、正倉院文書に関する研究である。東大寺写経所が残した一大文書群である正倉院文書を取り扱うためには、膨大な数の文書の接続関係を確認しながら復元作業をおこなう必要がある。その際、断簡の山を個々の写経事業ごとに仕分け、それらを「事務処理」あるいは「仕事」ごとに分類していく方法がとられた。

こうした正倉院文書の復元研究は、〈文書の機能〉を追求する視点をもたらし、石上英一『日本古代史料学』（1997年）、山下有実「文書と帳簿と記録」（1998年）、杉本一樹『日本古代文書の研究』（2001年）など、新たな古代文書論を模索する動きがでてきた。

また、従来の古文書学研究は、中世以降の文書を主たる材料として論じられ、古代の文書については、公式令の規定をなぞっただけの文書型式の説明のみで済まされる傾向にあった。しかし正倉院文書や木簡などの実例では、公式令の規定に合致しないものが極めて多い。こうしたなか、早川庄八『日本古代の文書と典籍』（1997年）は、新たな「古代の古文書学」確立の必要性を説き、研究は新たな段階へと入っていった。

2. 研究の目的

以上のような研究動向を踏まえ、本研究では、日本古代文書論の再構築を図ることを目的として、飛鳥・奈良時代の行政文書を中心に、木簡、正倉院文書、編纂史料の相互比較をおこなうことを目的とした。また、私は2001年から2009年にかけて奈良文化財研究所に在籍し、日本古代の木簡を整理・研究してきた経験をもつ。そこで木簡に関する理解をさらに深化させることも、今回の研究の大きな目的とした。

具体的な作業としては、〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉に注意しながら、日本古代の行政システムを具体的に再現し、従来の文書様式論に変わる新たな枠組みの構築を模索することにした。

なお、今回の研究では、日本古代に焦点を定めるが、その模範となった中国・韓国など古代東アジアの行政文書にも広く目配りすることによって、次なる目標とする「古代東アジア文書論」を構築するための布石とすることも意図した。

3. 研究の方法

上記のような研究目的のもと、以下のような研究方法で検討を進めた。

(1) 文書木簡の検討

本研究における最も基本的かつ中心的課題は、日本古代木簡研究を着実に進めることである。特に次の2点の研究を推進する。

①木簡は文字資料であるが、発掘調査で出土した考古資料でもある。木簡が出土した遺跡・遺構の状況を十分に踏まえ、木簡の形状

にも留意しながら、文字だけからは窺われない情報を最大限に読み取る。よって現場のフィールド調査、木簡の実物調査を重視する。

②木簡を群として捉える視点にたつて、木簡のライフサイクル（木簡が作成された後、いかにして使用され、最終的に廃棄されるにいたったのか）を明らかにしていく。この作業は〈木簡の機能〉を追求することに直結する。木簡の使用場面を具体的に思い描きながら、場面ごとに木簡の機能を追求する。

(2) 文書木簡と正倉院文書・編纂史料との比較研究

木簡と同様の〈機能〉をもつ文書を、正倉院文書のような一次史料、『類聚三代格』のような編纂史料に所収された文書のなかから抽出し、次の2点から比較研究をおこなう。

①〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉を念頭におきながら、日本古代の行政システムにおける〈文書の機能〉を追求する。

②〈文書の機能〉が〈文書の様式〉といかなる関係にあるのかを検討する。この作業を通じて、従来の文書様式論の問題点を再認識し、その克服を目指す。その際、日本の中世以降の文書研究にも目配りをし、有効と思われる視点は取り入れていく。

(3) 日本古代文書論の再構築

本研究の究極的な目標は、「古代東アジア文書論」の構築を視野に入れた、「日本古代文書」の再構築であるため、単に日本にのみ通用する論理ではなく、東アジア世界に通用する論理を考える。その際、次の2点に注意する。

①中国ではすでに秦漢時代には〈行政文書の原理・原則〉が確立しており、その後の東アジアに大きな影響を与えている。これまで日本と中国の比較研究では、奈良時代と同時代となる唐代や、その前代の南北朝時代が専

ら対象となってきた。こうした研究の重要性は改めていうまでもないが、「古代東アジア文書論」を組み立てるためには、思い切って、秦漢時代にまで遡って、〈原理〉〈原則〉を見極める視点をもつ必要がある。

②近年、韓国古代木簡の出土が相次ぎ、日本に直接の文化的影響を与えた朝鮮半島の状況が具体的にわかるようになってきた。韓国木簡はまだ数百点に限られるが、今後出土が相次ぐことは間違いなく、その研究成果を積極的に吸収する。

4. 研究成果

上記のような方針で検討を進め、以下のような研究成果があった。

(1) 文書木簡の検討

木簡図録や発掘調査の報告書などを使って、文書木簡を幅広く資料収集した。それに加えて、適宜、木簡の所蔵機関にも足を運んで木簡の現物調査をするとともに、木簡出土遺跡を中心とするフィールド調査などもおこなった。そうした結果、木簡の図録類からは十分にわからない情報を数多く得ることができた。

とくに大きな成果をあげることができたのが、「木簡の多機能性」についてである。木簡は一度の使用で役目を終えるとは限らず、二次利用、三次利用される場合が少なくない。木簡の文字情報（同筆・別筆関係）だけに目を奪われるのではなく、木簡の出土遺跡・遺構や木簡の形状などにも目を向け、木簡のライフサイクルを再現することによって、「木簡の多機能性」について、浮き上がらせることができた。

(2) 文書木簡と正倉院文書・編纂史料との比較研究

上記(1)の成果を踏まえて考察することで、飛鳥時代から奈良時代にかけての、木簡を使っ

た日常業務の流れを具体的に明らかにすることができた。

また、正倉院文書など紙の文書との比較検討をおこなうことによって、「木簡の多機能性」がかなり限定されたものであった、という見通しを得ることができた。

さらに、上記とは少し別の問題として、木簡・正倉院文書・編纂史料を中心に幅広く史料を集めることによって、どのようにして情報伝達がなされ、使者が移動をおこない、物資が動いていたのか、という問題を考えた。その結果、情報伝達の背後に、文字面には直接現れにくい、「当時者主義」があることも新たにわかってきた。

(3) 日本古代文書論の再構築

上記(1)の成果を通じて、日本古代文書論を再構築するための手掛かりを得ることができた。関連して重要な成果だと考えるのが、物品進上状と貢進荷札との比較検討である。従来ともすれば、物品進上状・貢進荷札ともに物品の移動時に用いられる点で共通するとされてきたが、使者の携行する物品進上状と、荷物に完全密着する貢進荷札とでは、決定的に異なっている、という興味深い知見を得ることができた。近年、佐藤進一「中世史料論」(1976年)による提言を受ける形で、文書(文書、記録)、付札(荷札、付札)、その他、という従来の伝統的な木簡の三分類法に対する疑問がだされているが、この三分類法にも依然として有効性があることを示すことができたと考える。

また、東アジアの木簡についても目配りをして、さまざまな分野の研究者と折りに触れて意見交換をすることができ、「古代東アジア文書論」の構築へ向けての準備にも着手できた。

(4) 研究成果の発信

以上の研究成果の大部分について、研究会

で発表をするとともに、論文や図書などの形で公表した。図書のなかには、2冊の単著『すべての道は平城京へー日本古代国家の〈支配の道〉ー』(歴史文化ライブラリー、2011年)、『飛鳥の木簡ー古代史の新たな解明ー』(中公新書、2012年)も含まれており、相応の成果をあげることができたと考えている。この2冊は一般読者を想定した書物でもあり、とくに後者は1万4000部を刊行したこともあり、研究成果を市民に還元する上でも意味があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ①市大樹、木簡と平城宮大極殿、地図 情報、査読無、114、2010、pp. 4-6
- ②市大樹、(書評) 館野和己編著『古代都城のかたち』、古文書研究、査読無、70、2010、pp. 123-125
- ③市大樹、(書評) 八木充著『日本古代出土木簡の研究』、日本歴史、査読有、747、pp. 109-111
- ④市大樹、飛鳥浄御原令について、歴史と地理、査読無、645、2011、pp. 21-26
- ⑤市大樹、木簡からみた飛鳥寺、明日香風、査読無、119、2011、pp. 29-34
- ⑥市大樹、(新刊紹介) 白石成二著『古代越智氏の研究』、ヒストリア、査読無、228、2011、pp. 111
- ⑦市大樹、御食国志摩の荷札と大伴家持の作歌、万葉集研究、査読無、33、pp. 207-260
- ⑧市大樹、(書評) 犬飼隆著『木簡による日本語書記史【2011増訂版】』、木簡研究、査読無、34、2012、pp. 225-234
- ⑨市大樹、東大寺領猪名荘とその絵図、つど

い、査読無、304、2013、pp. 1 - 6

〔学会発表〕（計8件）

- ①市大樹、志摩国の荷札木簡－調と贄－、古代史サマーセミナー、2010年8月22日、志摩ビーチホテル（三重県鳥羽市）
- ②市大樹、興道寺廃寺と周辺社会を舞台とした人々、美浜町歴史フォーラム、2010年9月25日、美浜町中央公民館ホール（福井県美浜町）
- ③市大樹、日本古代木簡の多機能性、“東亜簡牘與社会－東亜簡牘学探討－”研究会、2011年8月29日、花園飯店（中国・北京）
- ④市大樹、木簡からみた日本古代国家の形成過程、奈良歴史研究会、2011年12月20日、奈良女子大学（奈良市）
- ⑤市大樹、律令公民制の成立過程と木簡、日本史研究会、2012年1月8日、機関誌会館（京都市）
- ⑥市大樹、日本古代交通史の研究現状と課題、総合展示1室新構築にむけての古代社会の実態についての準備研究会、2012年3月11日、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）
- ⑦市大樹、飛鳥・藤原木簡の研究現状、国際学術研究会「交響する古代Ⅱ」、2012年3月20日、明治大学（東京都）
- ⑧市大樹、都の中の文字文化、国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「古代日本と古代朝鮮の文字文化交流」、2012年12月15日、イノホール（東京都日比谷区）

〔図書〕（計8件）

- ①市大樹、他、吉川弘文館、古代の都1 飛鳥から藤原京へ、2010、pp. 274-297
- ②市大樹、他、吉川弘文館、東アジア出土資料と情報伝達、2011、pp. 261-297
- ③市大樹、吉川弘文館、すべての道は平城京へー日本古代国家の〈支配の道〉ー、2011、

総247

- ④市大樹、他、美浜町教育委員会、こままで分かった興道寺廃寺、2011、pp. 63-86
- ⑤市大樹、他、中国法政大学法律戸籍整理研究所・奈良大学簡牘研究会・中国法律史学会古代法律文献専門委員会、東アジアの簡牘と社会、2012、pp. 85-99
- ⑥市大樹、中央公論新社、飛鳥の木簡－古代史の新たな解明－、2012、総303
- ⑦市大樹、他、吉川弘文館、日本史色彩事典、2012、pp. 247-249
- ⑧市大樹、他、吉川弘文館、国分寺の創建－組織・技術論－、2013、pp. 167-187

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市大樹 (ICHI HIROKI)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00343004

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし